



TITLE:

BUSHIDOにみる比較の言説

AUTHOR(S):

東馬場, 郁生

CITATION:

東馬場, 郁生. BUSHIDOにみる比較の言説. アジア・キリスト教・多元性 2010, 8: 45-49

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/108429>

RIGHT:

BUSHIDO にみる比較の言説

東馬場 郁生

はじめに

新渡戸稲造による *BUSHIDO* に関して、研究者はしばしば、新渡戸自身によるキリスト教的理解や意味付け、あるいは歴史的「武士道」からの変容を指摘する。『キリスト教をめぐる近代日本の諸相——響鳴と反撥』（加藤信朗監修、鶴岡他編、オリエンス宗教研究所、2008年）においてそれは、「明治期の一文化人の心の深層で熟成した欧米と日本の精神性との対比と融合の記録」（18頁）、「異文化との接触において、しかも特に優越感を抱いて接してくる相手に対して、誰もが感じる自己意識の現れ」（47頁）、あるいは「新渡戸の描くキリスト教風武士道は、西洋人読者の期待に添うよう計算されたもの」（同）、などと評されている。また、このように描かれた *BUSHIDO* は、我が国の武士道の道義をキリスト者、とくにクエーカー派の色彩の強い立場からみているため、武士道そのものではないとみなされる場合すらある（小澤富夫『歴史としての武士道』ペリカン社、2005年）。

歴史的武士道や同時代の日本キリスト教の研究者であれば、おそらく一読によって容易に抱かれうるこれらの批判であるが、新渡戸による「変容した」武士道が、同書において実際どのように形成されているのか、その分析にまで踏み込み精査したものはあまり見られない。

武士道についての新渡戸の説明では、東西の古典や道德観との比較が多くされていることは周知のとおりである。¹ 本発表では、*BUSHIDO* における比較の言説に改めて注目し、それを踏まえて新渡戸の武士道がどのように形成されているか考察したい。比較という作業それ自体に立ち戻り、その特質を彼の主張を解きほぐす手がかりにしたいと思う。その際、近年の欧米の宗教研究において活発な議論が展開されている、宗教比較論の視座を援

1 彼の比較法についての批判は多い。一例をあげれば、「大いに異なる宗教的、倫理的見方を同等と見做してしまうこの傾向は、宗教的多元主義を尊重する感性にも、また他者を他者として認識する態度にも敵対する」（加藤前掲書、87頁）との意見がある。しかし、これは今日的「諸宗教の神学」の価値観を100年前の記述に投影したもので、歴史性を無視した強引な批判と言わざるを得ない。

用する。

比較宗教をめぐる方法論研究者の創造性と想像力

今、宗教比較論は、比較にかかわる第三のものとして研究者の立場、関心に光を当てている。何を目的に（何に動機付けられ）、いかに比較をおこなうかが注目される。今日、この分野で依然として強い影響のある J・Z・スミスの表現を借りるならば、比較がもたらす言説は決して二者的ではなく、三者的である。つまり、比較においては、常に暗黙の「・・・に関して」が存在する。この第三者とは研究者の関心である。こうして、比較研究のあり方は、研究者の側の問題、すなわち比較を支える論理的前提の問題、さらには研究者自身の政治性や宗教性の問題になる (Jonathan Z. Smith, *Imagining Religion: From Babylon to Jonestown* [Chicago: The University of Chicago Press, 1982], p.21)。

比較する研究者の問題としては、その創造性と想像力が強調される。比較における類似と差異は所与のものではなく、比較する研究者個人の知的操作にほかならない。差異の中のある特徴が、研究者の知的可能性によって類似しているとして選ばれ、印づけられる。従来の比較法では類似の発見が主な内容だった。しかし、類似があくまで研究者の頭の中で知的作業として導かれる以上、それは「発見された」ものではなく、研究者によって「発明されたもの」に他ならない。スミスは、このような研究者の比較操作は、E・B・タイラーや J・G・フレイザーが提示した「呪術」magic と同じ意味であるとし、「比較のなかに呪術が宿る」(In Comparison a Magic Dwells) と表現した (ibid. p.22)。

BUSHIDO にみる比較の言説

上記の比較論を背景に、BUSHIDO において比較により導きだされる言説がどのような役割を果たしているかみてみよう。

まず、BUSHIDO では、比較は筆者自身の大変明確な目的をもって行われている。新渡戸によれば、比較は武士道を外国人読者、具体的には西洋人にわかりやすく説明のためにほかならない。

“All through the discourse I have tried to illustrate whatever points I have made with parallel examples from European history and literature, believing that these will aide in bringing the subject nearer to the comprehension of foreign readers.” (xiii)

(佐藤全弘訳：「論述の全体をとおして、私はおよそ自分の論点のすべてに、ヨーロッパの歴史や文学からの並行例をあげて示そうとつとめたが、それは、並行例をあげれば、問題を外国人読者にいっそうわかりやすくする助けになろう、と思ったからである」[28 - 29 頁])

実際、彼は、西洋に比較の対象を見つけ比較することが、英文で西洋の読者に対して武士道を語る唯一の方法だと考えていたかのようである。その根拠として、*BUSHIDO* 増補第 10 版における以下の文章があげられる。新渡戸は、比較対照を西洋文化に見いだせないという理由で「孝」の追加を断念したと述べる。

増補第十版序文

“In making emendations and additions for the present edition, I have largely confined them to concrete examples. I still continue to regret ... my inability to add a chapter on Filial Piety.... My inability is due rather to my ignorance of the Western sentiment in regard to this particular virtue, than to ignorance of our own attitude towards it, and I cannot draw comparisons satisfying to my own mind.”

（佐藤訳：「今回の改定版に当って、私は主として具体例の追加に留めた。＜孝＞について一章を付加できなかったのは残念である。（中略）孝についての一章を私が書きにくかった理由は、孝にたいする私たち自身の態度を私が知らないからというより、むしろ、とくにこの徳にたいする西洋人の感じ方を私が知らないからであって、それゆえ私は、自分に得心のゆく比較をすることができないのである」[32 - 33 頁]）

この点からすれば、新渡戸にとって、比較とは単なる理解の補助という役割をはるかに超えた、説明そのものとさえ言えるかもしれない。こうして、彼は、西洋の文献から比較対照を見つけ、武士道について語っていく。比較の一例を第 9 章、「忠義の義務」から見ると以下のようなものである。

Since Bushido, like Aristotle and some modern sociologists, conceived the state as antedating the individual, ... he must live and die for it or for the incumbent of its legitimate authority. Readers of Crito will remember the argument with which Socrates represents the laws of the city as pleading with him on the subject of his escape. Among others he makes them (the laws of the state) say: “...” These are words which do not impress us as any thing extraordinary; for the same thing has long been on the lips of Bushido.

（佐藤訳：「＜武士道＞は、アリストテレスや近代社会学者の何人かと同じく、国家は個人に先立つもので、（中略）そこで個人は国家のため、または国家の合法的権威の責任を負う者のために、生きまた死なねばならない。『クリトン』の読者は、ソクラテスが、その逃走の問題について、国法が彼と論争するとのべている議論をおぼえているであろう。とりわけ、ソクラテスはそれら（法または国家）にこう言わせている。（中略）このソクラテスの言葉は、私たち日本人には何ら異常なことという印象を与えない。というのも、同じことがすでに久しく＜武士道＞の唇にのぼっていたからである」[137 - 138 頁]）

さて、武士道の説明という新渡戸自身のいう執筆の目的からすれば、西洋の歴史や文学などとの比較をとoshi、第 15 章「武士道の影響」までに、語ることで十分であろうと誰もが思う。なぜなら、多くの研究者が指摘するように、第 16、17 章では、新渡戸のキリスト教信仰と彼の武士道理解をつなぐ言説が多くなされるからである。² 比較により描かれた武士道がさらに、一枠大きなキリスト教の護教論的言説の中に組み入れられ、キリスト教の優越性とともに意味づけられている。この部分は、武士道の内容の話で完結すると予想する読者には、当初の目的から逸脱したように見え、一方キリスト教と新渡戸の描く武士道の関係を論じる研究者は「これこそが同書執筆の真の目的」という。いずれにせよ、15 章までと、残りの 2 章の間には主張の意図に隔たりがあると思われる。

しかし、比較を通して全体を眺めれば、異質とも思われる最後の 2 章が、実は、同書の他の部分としっかりと連結していることは明らかだ。³ なぜなら、新渡戸は、それまでの比較の結果について、第 16 章で述べているからである。

“In studying the various virtues instilled by Bushido, we have drawn upon European sources for comparison and illustrations, and we have seen that no one quality of character was its exclusive patrimony.” (169)

(佐藤訳：「＜武士道＞によって教えこまれたさまざまな美德を研究するに当たって、私たちはヨーロッパの資料を引いて、比較と例証を行ってきた。そして、その性格特性のひとつとして、武士道の独占的遺産ではないことを見てきたのである。」[224 頁])

こうして *BUSHIDO* における比較は、ただ武士道の説明のためだけではなく、武士道の独自性を否定するためにも使われた。そして、その目的は、武士道を包含する普遍的真理としてのキリスト教とのつながりを示すことであり、さらにはキリスト教の道德体系としての優位性を語ることにほかならない。

このことは新渡戸が実際に行った比較からも明らかである。いうまでもなく、比較によって武士道の独自性を否定する結論を導くには、武士道と西洋文化との類似が強く示されなくてはならない。*BUSHIDO* の中では、70 余りの西洋文化との類似が描かれている。そしてこのうち、半数以上の約 40 が初版から 5 年後の増補版である第 10 版において追加されている（この指摘が可能なのは、佐藤全弘の翻訳において第 10 版の追加箇所が明示さ

2 他に、第 14 章に追加のものが一か所。

3 この点は、緒言における挿入的な新渡戸のキリスト者としての告白、主張とのつながりによっても指摘しうるが、比較を軸に眺めれば、より構造的な連結が明白である。

れているからである)。同時に増補版では、3ヶ所において、キリスト教の普遍性と優越性も追加されている。こうして増補版では、類似例を倍増させて武士道の独自性をより強力に否定する一方で、キリスト教の普遍性と優位性を説くのである。

このように西洋の道德観や美德と類似した武士道の提示は、先に紹介したスミスの言葉を借りるならば、比較をつかった呪術であり、新渡戸が自らの創造性と想像力を発揮して（発見ではなく）「発明」した武士道ということになる。それが比較以前の歴史的武士道と異なるのは当然であり、また、西洋の読者は比較される西洋の道德観、美意識に引きつけて理解するのであるから、西洋風武士道、あるいはキリスト教的武士道に変容するのも避けがたい。比較が行われた時点で、新渡戸の武士道は、彼の創造性と想像力によって、新しく作り出されていったのである。

おわりに

本論の冒頭で、新渡戸の武士道の変容に関し研究者が行う批判について述べた。彼らの言説を引き起こしているのは、*BUSHIDO* において新渡戸自身が行った比較の技であるといえよう。西洋的武士道、キリスト教的武士道と評される新渡戸の武士道は、ただ *BUSHIDO* の最初と最後に集中して現れるキリスト者としての告白だけによるのではなく、同書全般に流れる比較法によって生み出されているのである。

最後に付言するならば、新渡戸の武士道の特徴を理解するには、原文は英語であり、一般読者を対象にしていることを十分に踏まえなくてはならない。とくに、英語をいわば逆翻訳して日本語で読む場合、そこに日本語にはない英語特有の匂いが残り、特に宗教、信仰に関する記述にキリスト教の香が気になり、必要以上に本来とは違う姿が強調されやすい。新渡戸の意図をよりよくくみ取るには、やはり英文の原書を読むべきであろう。そこに、新渡戸の意図したローマ字の *BUSHIDO* が真に立ち現れるからである。また、英文で語られた時点で、漢字の武士道からローマ字の *BUSHIDO* への変容がすでに始まるからである。

(ひがしばば・いくお 天理大学国際文化学部教授)

